

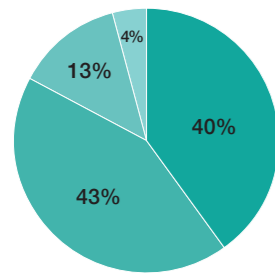
## 講評



今回のワークでは、身近な困りごとを解決するために、まわりの人がいればできることに気づいてもらいたいという思いがありました。最後の困りごとの背景まで考えるワークは難しく感じられた方も多かったかと思いますが、何人かスキルをもった人が集まれば解決できることを体感していただけたかと思えます。次回以降は、実際にある困りごとに対してどんなことができるかを考える企画をつくっていきます。最終的には困っている人のところへ行けるよう、どんどんと実践へと進めていきたいと思えます。

## アンケート結果

Q1. 今回のワークショップの感想を教えてください。



- 大変良かった
- 良かった
- 普通
- やや悪かった
- 悪かった
- 無回答

Q2. 一番印象に残っていたことは何ですか。

- 困ったことはないと言った方がいた。自分で探せば楽しい場所はたくさんあると仰っていて、自分から動くことの大切さを痛感しました。
- 困っていることだったものが、実はできることでつながったこと。
- 人それぞれ悩み事は違い、楽しいことも違う。当然だけど気づきました。
- 自分の困っていることと、他の人ができることがリンクしている部分が多いと思いました。
- 若い方や年齢の高い方の意見の違い。

Q3. どんなことを期待して参加されましたか。

- 自分ができること(無理せずに)が誰かのニーズに合ったら嬉しいなと思った。
- 福祉のことについての解決方法。
- 高浜市在住ではないので、高浜市についてどんなことに取り組んでいるのかを知るために。
- 元気をもらうこと。

Q4. 新たに気づいた高浜市の魅力や課題はありましたか？

- 高浜には「〇〇できる場所がない」という困りごとが多く挙っていましたが、多くの資源はあるのにそれを見つけれられていないだけなのだと考えさせられました。
- 女性の意見は自分では感じられないため参考になった。
- 人の活用について発想が少し少ないのかな？

Q5. その他感想をご自由にお書きください。

- 班になってコミュニケーションをとれて、問題解決まで皆で導けたのですごく楽しかった。
- 継続が力となりますように！

### T-LINE って？

ワークショップには「T-LINE」と呼ばれる市職員が入っています。ヒアリングやワークショップのファシリテーション技術を習得する研修を受けてきました。行政と市民、市民同士をLINEのようにつなぐ役割を担っているという思いが込められています。

## きっと仲間が見つかる。

# プロジェクト紹介カード



これから高浜市をよりよくしていくには、アイデアを考える人やプレーヤー、活動に興味をもってくださるようなたくさんの仲間を増やしていく必要があります。プロジェクト紹介カードを使って、ご自身がワークショップで楽しく感じることに共感を得られる人を見つけ、ワークショップ参加してくれる人を招待してあげてください。誰かを招待して来てくれた方には、何かプレゼントがあるかもしれません。

## studio-L

studio-L (スタジオエル) は、代表の山崎亮氏が2005年に設立。地域の課題を地域に住むひとたちが解決するコミュニティデザインに携わる。これまでに、いえしま地域まちづくり、海士町総合復興計画など、まちづくりのワークショップや住民参画の総合計画づくりなどに携わっている。http://www.studio-l.org

〈問合せ先〉高浜市役所総合政策グループ

〔住所〕〒444-1398 高浜市青木町四丁目1番地2 [電話] 0566-52-1111 (内線339) [E-mail] seisaku@city.takahama.lg.jp

# 高浜市で「何ができるか」はじめてませんか？

高浜市しあわせづくり計画  
ワークショップ

TAKAHAMA HAPPY LETTER  
vol.2  
2015.10.7.Wed



## 困りごとを自分たちで解決する方法を考えました。

59人の方にご参加いただき第2回ワークショップを開催しました。高浜と言えば「とりめし」ということで、今回は夜からの開催でしたので、とりめしのおにぎりを食べながら、お味噌汁を飲みながらワークショップを進めました。初回で体験した、楽しみと困りごとを掛け合わせてひとつのアイデアを生み出したように、今回は身近な困りごとを近くにいる誰かができることを掛け合わせて解決策を考えました。

### 第1回ワークショップの振り返り

studio-L代表山崎亮氏から、地域コミュニティづくりや地域福祉の講演がありました。テーブルワークでは、ひとりで楽しめることやみんなでやったら楽しかったことに、高浜の食や文化などの魅力を掛け合わせて、身近なものを楽しむアイデアを考えました。

- [日時] 10月7日(水) 19:00~21:00
- [場所] いきいき広場
- [プログラム]
- ・開会のあいさつ
- ・第1回ワークショップの振り返り
- ・ブレイクタイム
- ・悩みの共有ゲーム
- ・レクチャー
- ・身近にある福祉的なことについて
- ・テーブルワーク
- ・身近な困りごとと  
できること組み合わせよう
- ・発表
- ・講評
- ・閉会のあいさつ



## ブレイクタイム...

# 「私のエピソード」自己紹介ゲーム

同じテーブルについて人同士で仲良くなれるよう、いくつかの悩みのお題が書かれたくじをそれぞれがひいて、お互いの悩みを共有するゲームをしました。困っていることをグループの人たちに共有することで、単に自己紹介に終わるのではなく、その人の人柄や素性を知るきっかけをつくりました。相手のことをより深く知り、共有することで、どうすればお互いが楽しい関係を築けるかを考えていただけるゲームになったかと思います。



## レクチャー...

# 身近にある福祉的なことについて

### これからの福祉課題

日本社会は人口減少と少子高齢化の時代へと入っています。いまの人口は約1億2,000万人ですが、2060年までに約8,600万人まで減少、高齢化率は40%近くになるといわれています。高浜市はまだ人口増加の傾向がありますが、今後、高浜市も同じような課題を考えていくことになるでしょう。これらの課題と共に、社会保障費の問題もあります。1990年は11兆円でしたが、昨年2014年には30兆円まで跳ね上がっています。いままでは、行政が福祉サービスを提供してくれていましたが、膨れ上がる社会保障費だけで福祉サービスを補うのは厳しくなっています。私たち市民は、厳しくなる状況の中で、いかに暮らしやすいまちづくりができるかを考えていく必要があります。

### 身近な困りごとを解決する4つの事例

これからプロジェクトを進めるにあたり4つの事例を紹介します。①ひとつ屋根の下プロジェクト。高齢の独居者の家に大学生が3ヶ月程試しに住んでみます。期間が終了しても住み続けてもいいし、次に移ってもいい。高齢者からは年をとると若い人と話すのは嬉しいとよく聞きます。高齢者と若者が嬉しいと思える環境をつくっています。②清掃活動ゴミコロリ。障害をもっている人たちがゴミレンジャーの格好をしてごみを拾う取り組みです。ハンディはあるが、活動を楽しみ、そして興味がある人は参加してくれるという意図をもって取り組んでいます。自分も持っている障害とは関係なく楽しみをうみだしています。③コミュニケーションチャーム。英語やフランス語などが話せなくても、困り事やできることをアイコンで意思表示できるツールです。自分が身近にできることをサポートする取り組みです。④プラブ事業。オフィスワーカーが障害者とフットサルをしたり、介護施設で麻雀をしたりしています。オフィスワーカーと高齢者・障害者をマッチングして一緒に日常を楽しむ取り組みです。これら4つの事例に共通していることは、普段関わりのない人と身近なテーマを掛け合わせることで、これまでになかった楽しみを生み出し活動をしていることです。これからのワークショップでも考えて終わりではなく、この場に集まった人たちと、将来何かやりたいことを一緒にできる仲間を見つけてほしいと思います。



## テーブルワーク...

# 身近な困りごととできることを組み合わせよう

ワーク1では、自分が困っていること、自分ができていることをカードに書き起こしました。それをもってワーク2では、グループ内に自分が困っていることを話し、他の誰かができることとマッチングさせ解決策を考えました。ワーク3ではマッチングできなかった困りごとに対して、なぜ困っているのか背景まで考え、解決方法を考えました。自分では解決できないことも、身近な誰かができることと組み合わせることで解決できることに気づくワークとなりました。

 [ワーク1] 困っていること できることカード	 自分の 困りごと × 相手が できること	 [ワーク3] 課題解決 シート
	[ワーク2] 解決策の マッチング	

## 発表...

### グループ6



空き家が増えているという困りごとがあります。ゲーム大会やカフェなどをして、コミュニティづくりの場として有効活用する方法を考えました。他には、年齢を重ねるとともにお酒が飲めなくなってきた、現役だったころとは違い身体が動けなくなり、同じ食生活をしていても検査値が悪くなっていることから、日頃から健康に気を使わないといけないと話しました。

### グループ5



認知症や性同一性障害、発達障害などいろんな人がいることを知ってほしいと思います。情報を発信するために、例えば地域のラジオで彼らのことを伝えることができるのではないかとアイデアがわきました。また、元気にも関わらず自宅に閉じこもりがち高齢者を外に引っ張り出すために、土日だけでもイベントに参加できるようにするといったこともありました。

### グループ2



駅前の駐輪場が有料だったり、街中に駐輪場が少なかったりと、自転車に優しくないまちに思えます。自分たちができることは、関係する名鉄や市への呼びかけができるのではないかと考えています。また、困りごとの背景には高齢者や子育て世代と多世代に渡っています。市内には高齢者が子どもの面倒を見れる環境もあります。うまくマッチングする必要があると思います。

## 各班のアイデア抜粋

困りごと	困りごとの背景	自分たちができること
○家事ができない。	× ○一人暮らし。	= あいさつから始まるご近所付き合い。晩ご飯のおかずを1品おすそ分け。ご近所さんとホームパーティー。
○おばあさんを拾う。(2回も!) ○認知症の高齢者が増加する中で、地域で助け合う体制づくりができていない。	× ○増加し続ける認知症高齢者。	= 認知症という病気を知り、地域全員がサポーターとして活躍。
○赤ちゃん(生後6ヶ月未満)を預ける場がない。赤ちゃんがいるお母さんは、家族の協力がなく、病院・美容院にもいけない。兄弟児の受診や園の送迎も大変。 ○サロンの運営が不明。 ○仕事が少なくなってきた。 ○近くに買物できる場所が少ない(徒歩、自転車で行ける距離)	× ○健康自生地補助が将来変わる事。 ○かわらの仕事の減少。	= 現役を退いた看護師さんが「サロン」に入り、赤ちゃんを見守る場づくり。